
華の欠片

クロネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

華の欠片

【Nコード】

N9032L

【作者名】

クロネコ

【あらすじ】

皇女でありながら、父王に疎まれ　その臣下からもその存在を認められない少女の冒険です。

ただ　彼女には、心を許せる仲間がいる。

それだけが、まだ　救いだった。

ある真実を知ってしまうまで

序章

苦しい……息が、出来ない。

どうして 何で、こんなことになってしまったんだろう？

自分は、覚悟を決めたはずなのに、どうして 何で、こんなに苦しいの？

未来なんて、最初から期待しちやいなかったのに……

なんで、今になって こんなに後悔してしまっているんだろう？

目の前では、彼ら在必死で自分の名前を呼んでくれている。

だけど　もう　自分は、戻ることが出来ない。

もう　こうなる道を選んでしまったのだから。

誰も　この運命を変えることは、出来ないだろう。

これで　あの人が戻るのならば　自分は、消えてしまっても
悔いはなかった。

たとえ　この世から存在が消えてしまふことになっても
彼らならば、大丈夫。

きっと　みんなを助けることが出来るはずだから。

だから……そんなに悲しまないで？

私は、やっと 自分の存在価値を知ることが出来たのよ？

「本当に 可能なんですか？」

その質問に 相手は、どこか険しい顔。

「断言できるわけじゃないわ？」

けれど やらないよりは、マシなはずよ」

その言葉に 最初に質問した少女よりも 見守っていた2人の顔が、険しくなった。

「確証がないのなら 焚付けしないで下さいッ！

あなたは、何も知らないくせに！！」

「そうです。」

あなたは、所詮…………部外者なんだ」

2人の発言に ニツコリと妖艶な笑みを浮かべる女性。

「何もわかっていないのは、彼方達。」

わたくしは、ずっと あの子の助けになれなかったことを後悔していた。

だから ずっと 何か出来ることはないかと、調べてきたのわ？

そうして…………そうして…………やっと、その方法を見つけた」

「方法…………とは？」

お願いですから 教えてくださいッ！

私は、どうなっても構いませんから!!」

「そう…………覚悟があるのね？」

方法は、ただ1つ…………その方法とは――」

その内容に我先にと抗議の声を上げたのは、黙り込んでいた2人。

「いけませんッ！」

貴女は、一国の皇女なのですよ？！

こんなの……父王も悲しまれるに決まっているじゃないですかッ
！」

「その父王に疎まれ……物心がついた時から、1度もお声を掛けていただいた事がないのに？」

力いっぱい発言した少し年上の少女に 幼さを残す黒髪の少女は、鋭い視線を飛ばす。

その発言に 何も言えない。

「けれど 貴女は、大切にされておりましたよ？」

皇女として 恥ずかしくないように……」

「それは、戸籍上血の繋がった娘となってしまう以上……自分の名誉を汚されるのが、嫌だからです。」

あの男は、鬼畜でしかない。

あの時から 私は、あの男を父親とっていないのですから」

ハッキリと断言する皇女に 2人は、顔を見合わせるしかないだろう。

「本当に あの男は、我が妹を苦しめただけでなく 姪にまで、このような辛い想いをさせていたというわけなのね？

最初こそは、あの子が愛した男だから と口出しをしなかった。

こんな事になるんなら 無理やりにも、連れ戻しておくんだったわ？」

「だったら なぜ、王宮を出された時点で 迎えに来て下さらなかったのですか？」

その発言に 黒髪の少女の瞳が、炎のように輝いた。

瞳の色の变化に 女は、溜息をつく。

「知らせを受けなかったのよ。」

わたくしは、その頃　他国で様々な術式を学んでいてね？

妹が、王宮を追い出されたという話を聞いたのは……………つい最近の事だったの。

そして　今回の一件を知る事になった」

「じゃあ……………あの男は、何も知らせていなかったわけですね？

あの馬鹿王のやりそうな事だわ？

私に　母の存在を知らせなかったくらいなのですから」

「キラ……………どんなに卑劣な男でも、この国にとって　大切な王なのよ？」

「鬼神の如く覇者として　戦乱の世の中を鎮めた英雄。」

世界を治めるには、十分な才能と美貌を備えた名君。

けれど……………私にとっては、ただの残酷な人というだけだわ？」

「でも　それとこれは、話が違ってますッ！

あんな方法………そんなの残酷すぎるじゃないですか!」

「キラ………私達は、何が何でも 反対です。

いくらなんでも………そんな事をすれば あの方も悲しまれてしまいますよ?」

懸命に説得する2人に 少女は、フツと笑う。

「リン、テイ………私は、何と言われようと この方法に全てを賭けるつもりです。

そうすれば お母様は、助かる。

あの笑顔を再び見れない事は、心残りですが………生きていて下さるのならば、思い残す事もないの。

一緒に付いてくるのも良し けれど 私の想いは、変わらないわ?」

「ならば もし、その旅の中で他の方法を見つける事が出来れば?

そうすれば 貴女は、生きる道を選んでくれますか?」

リンと呼ばれた少女の言葉に　皇女は、息を呑む。

「キラ……………リンの言う通りです。」

我々は、貴女をお護りする者なのですよ？

なのに　みすみす、死なせませんッ！

勿論……………これ以上、悲劇が生まれる事も防がなければならない」

ティは、真剣な表情を浮かべて　言い放った。

2人の決意を聞いて　キラは、息をついてから　伯母に向き直る。

「お願いします、伯母上。」

2人と一緒に……………行きます」

揺るぎのない3人を見つめて　女は、深く溜息をついた。

そして　目の前に渦のような術式を展開させて　空間が歪んだ。

「こちらに戻ってくる時は、この笛を鳴らしなさい。」

どんなに離れた時空であろうが　わたくしに音が届くよう　細工
をしてあるから」

その言葉を受けて　3人は、力強く頷き合う。

こうして　旅が始まった。

序章（後書き）

この始まりの意味は、最後の方で明らかになります。

第一章

世界は、色によって成り立っている。

純粹なのは、純白に近く 色が濃くなるに連れて 危険が増し
漆黒は、悪意そのものと太古より、言い伝えられてきた。

人の肌も髪の色も瞳の色も、血筋ではなく その人個人の性質によ
って変わる。

王族の血脈は、白に近い銀髪であり 平民になってくると、色がど
んどん濃くなっていく。

それらの地球上の世界を統一しているのは、ただ1人の星（地球）
王。

各国には、王の派遣した領主が治めている。

王は、星王になった時から 神々からの褒美として 長寿の力を
授かり 今では、死することは避けられないものの 殆どの人々が、
不老不死に近い体質になった。

そして それらは、いくつか大国となっていき 各領国が、1つの国を名乗るようになる。

全ての中枢を担うのが、地球国（又の名を星国）。

そこに続くのが、暗殺などが専門となっている影の国、医術が発展を遂げている衛星国に自然の美しい農作物や果実などが宝庫の陽の国。

時は、あの長く暗黒の戦いの中から 100年と経っていた。

世界は、安定を取り戻しつつある。

全ては、世界を束ねる王の人望あつてのことだろう。

戦時中の人々の苦しみや哀しみを、知っているからこそ 王は、国を理解してくれていた。

勿論 それは、彼の王になる前から傍にいる者達も同じ事。

人々は、王の与える恩恵にいつも感謝を贈り続ける。

ただ 黒い噂を除いて……。

その噂は、新たに波紋を呼んで 国中をその話でいっぱいにしていく。

王都の人々は、その事に対し 驚きを隠せない。

だが 心の奥では、納得しているだろう。

王は、至高の如く気高く素晴らしい方だが その王妃となった女性
は、あまりにもその地位に似つかわしくない人物だったのだから。

この日　王宮内では、大事件が勃発しようとしていた。

事もあるうちに　王妃付きの女官が、国王に直訴してきたのだから。

その時　王を含めた側近達が、国財政について　話し合い中。

「陛下？貴方様は、王妃様の事をどうお考えになっておられるのです？！」

王妃様は、日々………蔑ろにされてばかりおられますわ？
なのに……なぜ、お救いにならないのです？！」

その発言には、会議を行っていた重鎮も　国の最高幹部である王の側近達も、目を大きく見開いてしまう。

ただ　国王・星羅王^{セイラ}だけは、笑みを崩さず　ニツコリと微笑んでいた。

「どう考えているだと？

そんなの当たり前だ。

大切な妻だ………それを、どこかのどいつが蔑ろにするとでも？」

テノールの響く声が、会議室の中に響き渡る。

その威圧のある声に　若い女官は、少したじろいだ。

「だって　陛下は、一度も………一度も、王妃様のお見舞いにい

らっしゃいませんわ？

あの方は、ずっと 待っておられるのに……。
どうして……。どうしてですか？」

「そんな事……。わかり切ったことなのでは？」

一同の視線が、王の座る席から時計回りに3つ目の席に座る老人に
目が向けられる。

この人物は、この国の宰相。

前の国王に長い間仕えていた、重鎮だ。

「王のご寵愛は、もう王妃に向けられていないということなのでしょう？」

それは、喜ばしいことではないですか」

「喜ばしいですって?!」

宰相閣下……。ご自分が、おっしゃられている意味がわかっておられるのですか？」

「勿論ですとも。

最初から……。反対していたのですよ。

あの黒き魔女が、この星の妃になられるだなんて。
もっと…相応しい高貴なお方を、新しく王妃に迎えるべきなのですよ。

あのような……。闇のように穢れた女など……。ッ！」

老人が言い終わる前に 机を、激しく叩く音が響き渡った。

急いで、視線を向けてみると 国王の拳が、テーブルに叩き付けられており ヒビも少し広がっている。

その美しい顔立ちからは、殺気が籠められているようだ。

宰相は、その光景に 思わず息を呑む。

まさか ここまで怒るとは、思いもしなかったのだから。

「宰相……貴方は、先ほどの俺の話を聞いていなかったようだな？俺は、王妃を蔑ろになどしていない……と。」

今は、先の一件があった為 興奮させるべきじゃないと考えた。その結果 他の片付けなければならぬ事を先に終わらせようとしているだけだ。

だから 花梨^{カリン}、部屋に戻って 少ししたら顔を出すという旨を我妻に知らせてくれるか？」

その言葉を受け 花梨は、飛び跳ねながら 会議室を後にする。

部屋は、再び沈黙が続いた。

けれど 中にいた面々は、どこか険しい顔。

その視線の先には、まだ睨み合っている王と宰相の姿が。

「宰相……何度も言っただろ？」

俺は、王妃以外 妃を持つつもりなどないと。

前に自分の娘を……と、パーティで連れてきたが 全て断った。その上 先の一件だ。

俺は、これ以上　王妃を傷つけない」

「何をおっしゃられますかッ！

王都での噂をご存知ないとは、言わせませんぞ？！

王妃の髪！瞳の色！！

全て………不吉を呼ぶ物が、揃っているのですぞ？」

その発言に眉を寄せたのは、共に戦ってきたギルド時代からの仲間達。

「確かに　戦争中は、人々をあの忌まわしい魔術で救ったかもしれませんが　今は、どうでしょう？

ちまたでは、最近の国民の難病が王妃の作った毒の実験によるものだと言われているのですぞ？

王妃は、王に与えられた菜園を使い　王が寵愛を授けるであろう、姫君達を陥れているとね？　王が寵愛を授けるであろう、

パーティでも　最高有力候補だった月華様が、突然　王妃のお渡しになった飲み物を飲んだ後、倒れられてしまったではないですか」

「あれは、演技ですよ？

見事なままに　陛下の胸の中に収まっていたじゃないですか。

それで　王宮の医者が、診察しようと駆け寄れば　既に元気になつていたのでから」

「ですね？

ご本人は、陛下に抱きとめられたことで　魔が払われたとおっしゃられておりましたが。

あれは、間違いなく　陛下に抱きつくタイミングと王妃への嫌がらせです」

顔を見合わせて呟いたのは、同じ顔をしている双子の大臣。

この2人は、ギルドの頃から適も味方も騙す戦略をする剣客だった。

けれど 王とは、何かと息が合い 今では、何の相談なしに計画を実行しても、許されている存在だ。

「左大臣、右大臣殿……それは、まるで 姫君を侮辱するお言葉なのではないでしょうか？」

あの方は、今の王妃よりも ずっと素晴らしい才色兼備なのですから。

そして、何より 陛下と同じく美しいプラチナブロンドであられます。

王妃のように黒いなど……本来は、ありえないことなのですから」

「別に髪の色など、関係ない。

俺は、王妃……妻の綺音（アヤネorアヤ）を、心から愛しているのです。

宰相……俺は、彼女の他に妻を持つことなどありえん」

王は、そう言い終えると 他の言葉を全てに聞く耳持たないという意思表示で テーブルの上に足を置いてみせる。

その態度に 宰相は、怒りで顔を真っ赤にさせ そのまま部屋を出て行った。

「あゝあ……知らないぞお？」

宰相は、狸だから とんでもない暴走をするかも。

あの人……自分の親戚筋でもある、月華姫をどうしても王妃にし

たいらしいから。

だから　どうしても、今王妃の座に就いている綺が邪魔なんだろうよ」

「おいおい　その暴走が起きる前に収めるのが、俺達の仕事なんじゃないか？

だって　確実に、王妃様が巻き込まれるはずだから。

それでも　我が従妹殿の話だと　王妃付きの女官の中にも、王妃を罵倒する輩が出てきているらしい」

「わかつているんなら　さつさと、何とか収めるッ！」

王の声は、どこか怒り狂っている。

「星羅……どうせ、あの一件の以降　万が一のことを考えて、本人や女官長である蒼華ソウカにも　知らせていない切り札があるのでしよう？」

ずっと黙り込んでいた義眼に義手姿の少し年上の男の問いかけに　王は、艶のある微笑を浮かべた。

「勿論だ、当たり前だろう？

それでも　綺音を狙う刺客は、増えてきているのだからな？　蒼空（ソウクウ or クウ）も蒼海（ソウカイ or カイ）も、きちんと仕事をこなしてもらいんだが？

玉瑛（ギョクエイ or ギョク）に至っては、既に裏づけに回ってくれているんだが？

どこかの双子は、どうしても麗しい従妹にしか興味がないと見える」

（笑みを浮かべているのに　なぜだか、恐怖心が沸いてくるのって

てどういうことなんだろう?)

(そりゃ……………星羅は、昔っから綺一筋だからな?)

双子は、互いの同じ顔を額同士くつつけて　囁き合う。

そんな2人の様子を　咳払いをする王。

「えっと　やり残した資料をまとめないと……………」

「俺は、蒼華に狸のことを気を付けるよう忠告しないと……………」

青みの掛かった銀髪を靡かせながら　男2人は、早々に退散した。

静まり返った会議室の中　何かを羽ペンで書き記す音が、響く。

「狼瑛(ロウエイ・ロウ)……………奴からの連絡は、あったか?」

その問いかけに　男は、ニツコリと微笑んだ。

「ありましたよ。

今のところは、無事におられるそうです。

向こうも　完全に信じ切っているようですし　あの蒼華嬢も、疑
つておられない様子です。

あの者には、つい先ほど報告が入りましたので　続行する事と新
たに他の者達への配慮などを命じておきましたが　よろしかったで
しょうか?」

王は、王宮内で影の宰相と慕われている男に　苦笑する。

「結婚したから 少しは、緩む部分もあると思っていたんだが
相変わらず、ガツチリしているな？」

そして、抜かりがない。

新婚の癖に…… お前もそうだが、美玲も素っ気なかったしな？

ちゃんと コミュニケーションを取っているのか？

何だか…… 機嫌が悪かったし」

狼瑛は、その発言を聞いて どこか訝しげな顔。

「あまり茶化さないで下さい」

その反応に 王は、苦笑気味。

ふと 男は、義眼の手を止めて 真剣な顔になった。

「ですが あまりに危険すぎやしませんか？

いくらなんでも 刺客と取引するだなんて……」

「大丈夫だ。

奴は、自分の正体を見破られてしまった以上 道は、1つしかない事を知っている。

それを利用しない手は、どこにもないのだから」

「裏切る可能性は？」

「ないだろう。」

奴には、もう帰る場所もない。

ならば その居場所を引き換えに 情報交換するのも、悪いことじゃない。

様子を見た限りじゃ 随分と今の状態を気に入っているようだから

な？」

「ならば、今の状態を保ち 彼の潜む者にも、命じておきましょう」

狼瑛は、そう言い終えると ゆっくりと立ち上がった。

片足は、先の戦争で腕と一緒に切断してしまっているのだから、今は、義手と義足を使用している。

「狼瑛……奥方に頼んで、綺音の好物の品を作ってくれるよう頼んでくれるか？」

勿論 栄養面でも考えて」

王の頼み事に 男は、苦笑して 了承という意味で中途半端に頭を下げた。

「花梨……………貴女、そんな事をなさったの？」

ベットから体を起こしている黒い艶のある髪を三つ編みに垂らしている女性は、思わず苦笑してしまっていた。

「だって 酷すぎるじゃありませんかッ！」

私 どうしても……………どうしても、王妃様の気持ちを知って頂きたくて……！」

花梨は、真剣な表情を浮かべて 膨れっ面になる。

その顔を見て 女は、ニツコリと微笑む。

「ありがとう……………貴女は、わたくしの為にそのように怒って下さっているのでしょうか？」

とても嬉しいわ？」

フフフ……………花梨は、本当に優しいです」

「王妃様？」

貴女様のことを大切にしておられるのは、私達だけじゃありません。陛下は、勿論の事 他の方々も、思っ下さっていますもの」

その言葉に 王妃：綺音（アヤネ or アヤ）は、花の如く微笑んだ。

「当の本人は、自覚を持っていないけれど……………」

その声に振り返ってみると 銀の装飾の施されたお盆を手に持って

いる微笑を浮かべた美しい女性とその後ろを何かを運び込んでいる
白いエプロン姿の女性が。

「蒼華……………それに美玲も」

王妃は、部屋の中に入ってきた訪問者に目を剥く。

「2人とも……………先ほども、色々と話に参られましたよね？」

蒼華は、空か海から別として　どっちなに呼ばれていましたし」

「綺……………いい加減に、彼らを見分けてあげてもらえない？」

最近じゃ、他の官吏達に2人合わせて大臣と呼ばれてしまっている
そうなんだもの。

まるで……………セツト商品みたいだ　って、落ち込んでいるみたい
だし」

「いや　セツトでしょう？」

同じ顔が2つ並んで　揃いも揃って、美形なんですもの。
今までの人生で、損した事など　絶対になかったでしょうね？」

「あると思うんだけど？」

確か　2人の好みが、似ているって話　前にしたことがあったで
しょう？

実は、ギルドで陛下達に出会う前に　同じ人を好きになったそうな
んだけど　その彼女が、どちらも同じ顔だから　自分の為にコン
テストを開いて欲しい　って言い出したみたいで」

「それは、何だか　傷付きますね？」

お2人とも……………心の傷は、大丈夫だったんですか？」

美玲は、花梨が置いたベツトの上に取り出した机の上に簡単なスー
プなどを置いていく。

「うーん？」

空は、あんまり顔に出しちやいなかったんだけど……海は、見る
からに落ち込んでいたかもね？

私は、その時まだ幼かったから 何がどうなっているのかさえ、
理解していなかったんだけど。

まだ両親が生きていて……母曰く、大人の階段を上ったのよ
って、教えてくれたわ？」

「待つてくださいッ！」

その説明……何だか、おかしくありません？」

花梨は、思った言葉をそのまま口に出した。

けれど、すぐに失言だと思い、急いで両手で口を押さえ込んだ。

「大丈夫よ、花梨。」

あの2人が怒りを露にするのは、王への不当な失言と麗しの従妹で
ある、蒼華の事を悪く言った時だけですもの。

今のは、その部類には入りませんよ？」

「後は、綺音様への暴言も含まれますよ？」

だって、王妃様の事を侮辱するという事は、国を侮辱するに等しい
んですから」

美玲は、クスクスと微笑んで、スープを王妃に薦める。

「確かに　　そうでしょうね？」

でも……………優先対象は、蒼華で　その次は、王ですよ。
わたくしの場合は、建前なのですから。

あのような一件があったんですもの……………王も、その事で　少し距離を置こうとするのも悪い事じゃありません」

どこか哀しげに断言する綺音に　一同は、戸惑いを隠せなかった。

ここで、違うと言いたい。

だが　それは、誰もが知る真実なのだ。

確かに　あの数ヶ月前の一件以来　王の足は、この部屋へ向かうのを避けているとしか思えようがないのだから。

沈黙してしまった皆の様子に　王妃は“そんな顔をしないで下さい”と、笑顔を見せる。

「わたくしは、別に悲しんでいるわけじゃありません。
だって　彼らの言っていた言葉は、事実なのですから。
真実を申し上げたのに　不当にも、投獄されているあの方々の家族の方々の気持ちを察しなければいけませんのに」

「ですが……………あの一事件には、裏があるのでは？」

美玲の言葉に　皆は、険しい顔になった。

全ては、あの一事件から歯車が狂い始めたのだ。

4（前書き）

久しぶりの更新です。

少し話の内容が、変わっていつているのですが 頑張って終わらせるつもりです。

長いです…………。

「そういえば、花梨？」

新しく入ってきた侍女の指導はどうなったの？」

花梨は、そう言われて初めて　ハツとしたように目を大きく見開いた。

そんな少女の様子に　一同は、苦笑してしまっている。

「やつぱりねえ？」

さつき……他の子達が、慌てふためていたのだけど　原因は、貴女だったか」

蒼華の発言に　花梨は、申し訳なさそうに肩を竦めてしまう。

そして　”では　行ってきますッ！”と　言い残して部屋を出て行った花梨に苦笑しながら　ベットに座っている女は、首を傾げた。

「もう　蒼華？」

花梨をそんなに苛めないで頂戴？

だけど　どうして今回の教育係は、貴女（蒼華）じゃないの？
いつもならば　蒼華が礼儀作法とかを叩き込んでいるのに」

王妃の疑問に　美玲が何か知っているのか、ニッコリと微笑んだ。

「それは、王のご命令だそうですよ？」

しばらくの間は、蒼華様　王妃様のお傍を離れないようにと言い渡されたとかで。

どうしても無理な時は、お部屋に強力な結界を敷くことになっているそうなんです」

それを聞いて 綺音は、目をパチクリさせる。

「いくらなんでも そこまでする必要は、ないんじゃないかしら？ たかが 刺客相手に……………」
「たかがじゃないわ?!」

蒼華は、相手が王妃である事を忘れてしまったかのように 声を張り上げた。

「貴女は、一国の王妃なのよ?!」

それに 他の人達は、貴女のことを悪意を持っているかもしれないけど 大戦中に一番 活躍したのは、貴女じゃないのツ!

髪の色と瞳の色が、闇色だからって……………一番感謝しなければなら
ない相手を追い落とそうとするなんて あいつらは、最低なのよ!!
戦争になったら 勝手にしてくれと言わんばかりに安全な場所に避
難していたくせにツ!

戦いが終わって、命を落とす危険がなくなれば ああだ、こうだと
命令口調で自分の手柄のように威張り散らす。

素人だったはずの綺音だって、持てる限りの知識でみんなを守って
くれていたっていうのにね?

手の平を返してくるなんて 連中は、見る目がないのよ」

「そうですよ……………私は、戦争の恐ろしさを身を持って知っています。」

現に 私の家族は、戦渦に巻き込まれて死に別れてしまつて 恐らく
生きてはいないでしょう。

私自身も 醜い火傷を負つて 色々と白い目で見られてきました。
でも 王妃様は、私のことを対等に扱つてくださった。

試験さえも受けられずに 色々と嫌がらせを受けて泣くに泣けなかった私を慰めて下さったのは、貴女です。

あの時……私は、本当に嬉しかったんですよ？」

蒼華の言葉に何度も頷きながら 美玲は、銀のお盆を抱きしめて 懐かしそうに微笑む。

2人の声援を受けて 綺音は、小さく笑う。

「そういえば……麗美^{レイミ}から手紙が届いたのよ？」

あの子のいるところにも 色々と噂が聞こえているらしくて」

「まあッ！」

だったら……少しは、顔を出してくださいればよろしいのにね？

大戦中は、彼女も色々と危険な場所を渡り歩いていたそうなのに」

蒼華は、呆れたように溜息をつく。

いや……実際に呆れているようだけど……。

「麗美は、子供の頃から自由を愛しているから。

12歳の時 祈ってばかりの輝が嫌だと言い出して、お父様とお母様の反対を押し切って 偶然に訪れていた魔術師の弟子になってしまったんだもの」

これを聞き 美玲は、呆氣に取られる。

「12歳でそういう決断をするなんて 凄いですね？
しかも ちゃんと魔術を学んで……大戦でそれを生かすだなんて」

「麗美は、あまり良い出来じゃなかったと言っているけどね？

本当に優秀な魔術師なら 犠牲者を、もっと出さずに済んだそうなんだもの。

あそこまで謙虚なのって不思議よね？

私の方が、何にも出来なかったのに」

溜息交じりの発言をする王妃に 蒼華は、訝しげな表情を浮かべた。

「まだ 言いますか？！

貴女だって 色々な知識を持って 私達の助けになったじゃないのッ！

蒼海と蒼空が、敵軍の毒矢で倒れた時 誰もが助からないと思ったのに それを救って見せたのは誰？

魔術が一切効かない 軍隊に痺れ薬の粉末を燃やしてたった1人で100人も敵軍を再起不能して 敵の大將を屈服させたのは、どなただったかしら？！」

それに対して 綺音は、口籠る。

逆に 美玲の方が、そこまで凄い事を成し遂げたのかと驚いているらしい。

「狼瑛様が瀕死の重傷を負ったのを、救った話は知っていましたけど」

「ああ……あれですね？

そうです あのだ処だって……貴女にしか出来なかったことなんですからね？！

呪による攻撃で体が腐敗してくるものだったのを 貴女は、それを止めるどころか本元そのものを跳ね返した。

狼瑛様は、目と片腕を失くしてしまいましたけど 同じ被害を受ける者は、いなくなっただわ？」

延々と続くお説教に 王妃は、小さく溜息をついた。

〃 〃 〃 〃

「えっと……貴女達が、新しい侍女？」

3人だけなんだ てつきり、もつといるのかと思っていたんだけど」

花梨は、不思議そうに首を傾げた。

「「「よろしくお願いしますッ！！！」」」

仲良く3人の声が、揃^{そろ}う。

息ピッタリな様子に 花梨は、ニッコリと微笑んだ。

「私は、花梨よ？」

貴女達の名前を覚えてくれるかしら？」

その言葉を受けて 一番端に立っている赤銅色の髪をした勝気な顔立ちの少女が、少し前に進み出て スカートの裾をたくし上げて一礼する。

この仕草からして 上級のマナーを身に付けているらしい。

1つ1つの動きに洗礼さがあるのだから。

「わたくしは、鈴^{リン}と申します」

その声は、名前の通り 響き渡るものだ。

次に進み出たのは、3人の中でも一際目立つ容貌の艶のあるプルシアンブルーの髪を持った美少女。ひときわ

「わたしは、遅レイといひます」

少しアルトが入っているが ハスキーボイスが、他の侍女達にどう影響するだろうか？

花梨は、そのことを考えて 思わず苦笑してしまう。

なので 最後に進み出てきた少女の顔をちゃんと確認する事が出来なかった。

「綺羅キラです」

顔を長い濃い目のネイビーブルーの髪の毛で見え辛い。

ただ その声は、可愛らしかったと思う。

「うん……………よろしくね？」

まずは、王宮内の仕事関係を説明しながら 確認していこうか。

最初に侍女として入ってきたら 数ヶ月は、見習いとして色々な雑用をこなしていけないといけないから。

それで 1人でやっていけると判断されたら……………王宮に滞在されている方々のお世話を任されていくの」

「花梨さんも、どなたかのお世話をされているんですか？」

鈴は、どこか興味を持ったかのように質問してきた。

「うーん……私はね？」

王妃様のお付の侍女をしているの」

その言葉を受けて　3人が息を呑んだのは間違いないだろう。

「もしかして　国中で流れている噂の事を気にしている？」

あんなの　嘘っぱちよ？

だって　王妃様は、とっても素晴らしい方なんだから。

あれは、あの方の事を疎ましく思っている人達が　悪いように流しているだけよ。

本当の綺音様は、とっても優しいのよ？」

説明してみたものの　新人達は、口を閉じたまま。

花梨は、どこか不安を覚えながら　王宮内を新米の侍女達と一緒に
渡り歩いていった。

「あれ、花梨？」

珍しいじゃないか……君が、蒼華や美玲以外と一緒に城内を歩いているだなんて」

その声に振り返ってみると 大量の資料を抱えた見知った文官の補佐役が……。

少し離れた場所には、彼の上司らしき年配の男が佇んでいた。

花梨は、少し顔を強張らせて ”そうかしら？” と ニツコリと微笑んだ。

その様子を見つめて 3人の新米女官は、顔を見合わせている。

「今日は、新しく配属されてきた女官の子達の案内を任されているんですよ。」

蒼華様は、王妃様のお傍におられますわ」

花梨の言葉を受けて 青年は、不思議そうに首を傾げた。

「ふん？

そつえば あのパーティの一件から、王妃様のお体が優れないようだね？

精神的にも、堪える事だったから フォローをしないといけないよ？」

「累、こんな場所で立ち往生している。
仕事中のだから 女に感^かじているんじゃないッ！」

頭ごなしな発言に 女官達は、嫌悪感を露にしたいのを必死で堪えた。

この世界では、女性でも権力を持つものはいるもの それは、ごく僅かだ。

ほとんどが、男社会なのだから。

特に 王宮に何かと足を運んでくる貴族のほとんどは、女性を蔑ろにする傾向が強い。

それが、王妃という王の次に権力を持つ人物に対しても……………。

今では、表立って 王妃を廃し 新しい貴族の令嬢か他国の姫君を新たな妃に迎えるべきだと行動を露にしているのだから。

中でも一番 有力候補だと噂されているのが、現在の宰相の姪に当たる 公爵家の月華姫だろう。

「何だか 怖い人ですね？」

あのご老人……………何者なんですか？」

鈴は、息を呑みながら 呟いた。

「さっきの人は、公爵家の現当主様よ。

奥方は、降嫁された先々代の陛下の側室の娘様。

あの様子からして 宰相閣下に呼ばれたんでしょうね？」

元々は、文官という役職を持っているんだけど さつきの累つていう補佐に仕事のほとんどを押し付けちゃって 自分は、公の場にしか顔を出さないの」

溜息をついている先輩女官に 3人は、顔を見合わせる。

「最初に花梨様にお声を掛けていらした方は、あまり権力とかに興味がなさそうでしたね？」

先ほど2人が向かった廊下の先を見つめながら 綺羅が言う。

その言葉を聞いて 花梨は、空笑い。

「累は、何にも考えていないのよ。

だけど、不思議な事に いつも幸運が舞い降りているの。

本当は、公爵様の前に仕えていた官僚が、突然 爵位剥奪と国外追放になったんだけど 彼は、どういう策略があったのか 何を逃れたらしいから。

影では、累が補佐になったら 厄介な問題が露見してしまうっていう、訳のわからない噂まであるのよね？」

く
く
く
く

青年は、部屋に入るなり 大きな溜息をついた。

その様子を見つめて 元から中にいた面々は、不思議そうな顔を
している。

「珍しいな、累？」

お前が、そんな風に落ち込んでいるだなんてさ？」

蒼海は、からかうように カップに注がれているお茶を啜^{すす}った。

「落ち込んでいるっていうか 狸の話し合いに嫌気が差してきたところなんじゃないですか？」

そろそろ 頃合ではないかと思っているのですが」

狼瑛は、ニツコリと微笑んだ。

「うつわあゝッ！

狼瑛様っ……………その笑顔は、怖すぎますよ？」

だけど 頃合ねえ？」

もう少し泳がせてもいいんじゃないんですか？」

蒼空は、お茶菓子を摘みながら 首を捻る。

「星羅が限界だ。

それに 今 王宮内で流されている噂は、最近じゃ 巷^{ちまた}にも流れているらしい。

このままでは、前以上に 王妃様のお立場が危ぶまれる。

今は、お体を崩されているから大人しくなさっているだろうが 動けるのならば、書置きを残して 城を飛び出してしまつかもしれないぞ？」

「確かに……………あの子なら やりかねないかも。

そんでもって 麗美姐さんに保護されでもしたら、二度と王宮に戻ってこなくなっちゃうだろうからね？」

「そんな事態になつてみる 城中が血の海と化すぞ？

星羅の綺音に対する執着は、異常を通り越しているからな？

普段は、無関心のように思えるのに しっかりと守ってみせているんだから」

双子の大臣の話を聞きながら 類は、頬杖をつく。

「後は、花梨ですよ。

彼女は、僕が密偵だつてことに気が付いていないんですよ？

花梨は、公爵の部下である僕にも 何かと嫌悪感を抱いている……
… 同類つていふような感じで」

「驚いたな………？

累つてば 花梨に惚れていたのか？

確かに あの子の性格は、お前の腹黒さを受け入れてくれるだろうよ」

「好意を寄せている相手に 疑われるのは、辛いもんな？

何だつたら 2人で組むか？

元・間諜と密偵のプロのカップルは、見えて面白そうだ」

とんでもない話に 類が声を張り上げ顔を真っ赤にさせていたのは、
この場にいる者達だけの秘密……。。

5（後書き）

実は、花梨って ただの天然な女官じゃなかったんです……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9032/>

華の欠片

2010年10月22日07時59分発行